

[資料 2] 日本の大学探検部の始まりと学大探検部の系譜
木俣美樹男

The Beginning of Expeditionist Club with the Universities in Japan:
Especially on Kyoto University and Tokyo Gakugei University
Mikio KIMATA

檜原村藤倉のさとやま学校・東京を訪ねた際、本棚に地底探検の古い本があった。小学生の頃に読んだ記憶があるフランスのケーピングのお話だ。子供の時から本の紙魚で、探検記も市立図書館や学校の図書室から借りて読んでいた。もうすぐ終わるだろう人生の探検記は書き終えた。苦難はあったが、それは探検につきものの冒険だから、その結果の自業自得である。ただし、家族との時間を蔑ろにしたことは職業とはいえ、悔いること多く、申し訳なかった。僕の探検は学術探検と観光旅行であった(図 1)。詳細は自選集に書いたもので、ここでは記さないで、日本の大学探検部の始まり(京都大学)と僕らの自然文化誌研究会(愛称、東

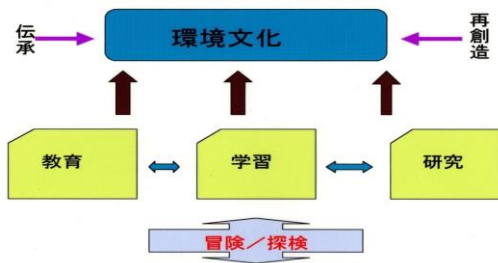
京学芸大学探検部)の50年史を簡単に振り返っておきたい。

長澤和俊(1969)から冒険行動の前史を表1に要約抜粋する。15世紀末かに始まったヨーロッパ人の地理的探検は、20世紀の初め頃までに地球上のあらゆる地域を明らかにした。このために、これからの探検は、ある地域の内容や実態を明らかにするための探検となろう(第1型)。課題追及のための探検(第2型)はコムギの祖先を求めた木原均の中東探検、南米アンデスに初期文明の発掘を志した泉靖一の探検などである(川喜田二郎)。記録の競争の探検(第3型)は名誉を求めてのスポーツ的、冒険的である。

冒険/探検は人生の道草
目的らしいものの分類

- ・ 経済 金儲けの種探し
・ 軍事 戦争の手伝い
・ 学術 調査★研究材料を探す
・ 宗教 布教、修行、経典を探す
・ スポーツ 心身の楽しみ
・ 観光 物見遊山
・ その他 なんとなく放浪

伝統知と失われた穀物の復活



どのように辿るのか、人生の旅路を

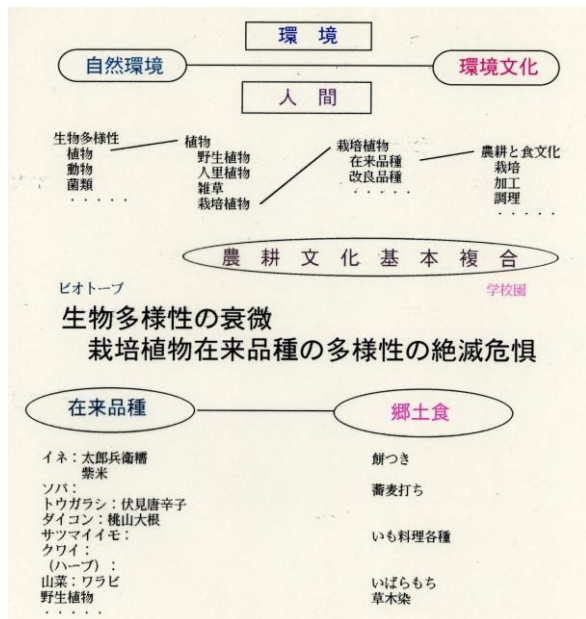


図 1. 探検/冒険と主課題との関係 (40周年記念第35回環境学習セミナー2015)

探検とはサイエンスとアドベンチャーの魅力に富んだカクテルである（フックス）。探検に冒険はつきものであるけれども、決して冒険をすることが探検の目的でも本来の姿でもない。探検とは人類が未知に向かってその真実を知ろうとする探求行動である。

学術調査は出発前にすでに調べようとするものが決まっており、いわば仮説の検証である。一方、探検はもっと全体的、全人的な未知の世界の調査である。探検と言うのは、やはり地球の上で、自分らの領域の外

に秘密を求めていくのがその筋道だ（中尾佐助）。探検には冒険の要素が入ってくるのである。結局、探検とは人間が自然に対し、いかに不撓不屈の精神をもって戦えるか、その可能性と限界を見極めようという要素も入っている。（探検への）非難の大部分はむやみに他人にいいことをさせたくないと言った島国根性、日本の伝統的な思考形式による中傷なのである。

本多勝一（1998）は次のように言っている。素材がなければ、プラスにさせることはできない。探検は素材としての意味を持

表 1. 現生人類の探検/冒険の前史

冒険前史		主な事例 (13万年BP~1913)	
年代	隊長	海外	日本
13~12万年前	ホモ・サピエンス	ホモ属の出アフリカ	
8~6万年前	ホモ・サピエンス	ホモ属の出アフリカ	
中略			
前7世紀	アリストテレス	スキタイ地方探検	縄文時代
前334~323	アレクサンドロス大王	東征	弥生時代
399	法顕	求法のために西域を経てインドへ行き、帰途は南海諸国を経て帰国	経典を求める
629	玄奘三蔵	インドに行き、西域経由で帰国	
中略			
1245~1247	プラノ・デ・カルピニ	モンゴル帝国に遣使	
1253~1256	ギョーム・ルブルク	モンゴル帝国に遣使	
1254~1291	ポーロ父子	モンゴル帝国	
1325~1349	イブン・バトゥータ	アフリカ、アラビア、アジア各地	
1405~1432	鄭和	モロッコからニジェール川を探検	
1497~1499	ヴァスコ・ダ・ガマ	インドに行き、西域経由でインド航路探検	植民地獲得：第1期
1501	アメリゴ・ヴェスプッチ	ブラジルを探検	
1518	ヘルナンド・コルテス	メキシコ遠征	
1519~1522	マゼラン	世界周航	
1524	フランシスコ・ピサロラ	インカ帝国	
1533	ピサロ	インカを征服	
中略			
1635	佐藤嘉茂左衛門	樺太踏査	
1785	最上徳内	樺太踏査	
1809	間宮林蔵	樺太、沿海州を探検	
1852	リヴィングストン	ザンベジ川水源を探検	
1893	スウェン・ヘデン	中央アジア探検	
1899~1902	河口慧海	求法、ネパールからチベット	
1901	ロバート・スコット	南極探検	
1902	大谷光瑞	求法、中央アジア探検	
1910	アムンゼン	南極探検	
1910	白瀬轟	南極探検	
1913~1923	多田等観	ブータンからチベット	

長澤和俊（1969）よりごく一部を抜粋。

つのである。探検精神とはパイオニアの精神である。常に率先して新しいジャンルを切り開き、先鋒に立つ精神である。地域探検には、探検家の精神が誠実なヒューマニズムによって貫かれていなければ、決してその地域の真相を理解することはできない。ましてそこに住む人間の探検などは、とうてい不可能であろう。

また、梅棹忠夫(1959)は次のように言っている。冒険の否定という、日本において一般的に承認されている人生哲学の原則に合うからなのだ。探検は単なる冒険ではない。それは慎重な準備とさまざまな配慮の

上に組み立てられた複雑な事業である。同時に、根本において冒険的精神を含めぬような探検などと言うものが、意味を持つだろうか。一般的な人生の問題として、冒険を全面的に否定するような考え方が、健康さと創造力を持ち続けることができるものだろうか。同じ原理が、日本社会のあらゆる場面で、作用している。命令を守って危険を冒すことはあっても、自発的な意思で、未来に対して自分をかけるということは、日本では、始めからないのだ。

日本で最初に創部された大学探検部は京都大学探検部で、本多勝一が中心となって

表 2. 京都大学探検部の創立と継承発展

年月日	隊長 (演者)	話題	参加者
京都帝国大学			
第3期 学術探検			
1935	今西錦司	京都帝国大学白頭山遠征隊	今西、西堀、奥、谷、加藤、ほか
1936	加藤泰安		京都帝国大学旅行部
1938	木原均	内モンゴリア	AACK=京都学士山岳会
1938	鈴木信	内モンゴリア	京都大学旅行部
1939	今西錦司	内モンゴリア	今西、森下
1939	布施光兼	小興安嶺	学生隊
1940		カラフト	京都帝国大学旅行部
1941	今西錦司	ボナベ島	京都探検地理学会、今西、川喜田、梅棹、吉良、森下、中尾、
1942	今西錦司	大興安嶺	今西、梅棹、川喜田、伴、吉良、今西錦司、藤田和夫、梅棹忠夫、川喜田二郎、吉良竜夫、伴*、今西寿雄、中尾佐助、梅棹、
1943	今西錦司	白頭山	
1943	藤本武	カラフト	
1939~1945			
第2次世界大戦:軍事、諜報			
京都大学			
	第1回探検講座		
1956年1月20日	今西錦司、中尾佐助	第1週: イントロダクション、資料写真の撮り方	今西他0B7名、学生10名
1956年1月27日	川喜田二郎	第2週: フィールド=ノオトのとり方	今西他0B7名、学生8名
1956年2月3日	桑原武夫	第3週: 探検精神・冒険精神・その他 地図模写、ウルドゥー語学習、運転免許取得	今西他0B7名、学生11名
1958年2月10日	梅棹忠夫	第4週: 異民族との接触	名簿なし
1958年2月17日	藤田和夫	第5週: 探検の準備	今西他0B8名、学生11名、部外者1名
1955			
	木原均	京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊	木原、山下、原田、北村、中尾
1958			
		大阪府立大学東北ネパール学術調査隊	中尾
1966			
	山下孝介	京都大学コーカサス地方植物調査隊	山下、阪本、
1967~1968			
	山下孝介	大サハラ学術調査隊	山下、谷、中尾、阪本、福井、26名
1975			
	古屋野正伍	東京都立大学ネパール学術調査隊	古屋野、阪本、
1977~1978			
		広島大学日韓合同調査隊	ソウル大学
1977~1980			
	谷泰	有畜農耕社会の比較研究	谷、阪本、小林、
1983~1984			
	福田一郎	東京女子大学ネパール学術調査隊	福田、山本、小西、里和、木俣
1985~1990			
	阪本寧男	京都大学インド亜大陸学術調査隊	阪本、谷、応地、小林、松井、河瀬、木俣
1988			
	田中正武	横浜市立大学木原生物学研究所	阪本、田中
1993			
	木俣美樹男	東京学芸大学中央アジア学術調査隊	木俣、北野、石橋、中込、日比野、須藤、叶田、

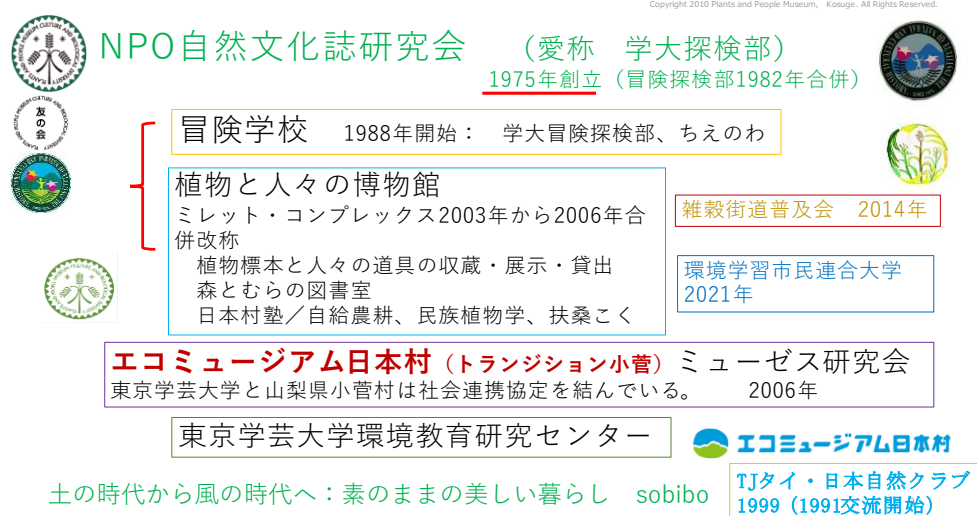


図 2. 自然文化誌研究会の主な活動の関連

準備をして始まった (本多 1998)。彼は今西錦司や木原均の学術探検に憧憬を抱き、大学探検部を創ることにした。イギリスの大学探検部を参照しながら、探検講座を開催して周到な準備を行い創立に至らしめた。今西ら OB と本多ら学生の学び合い、話し合いで進められたのだが、ここには当時および未来の、生物学や文化人類学の優れた研究者や学生たちが集っていた。この間の概要を表 2 にまとめた。

第二次世界大戦に敗戦後、多くの海外学術調査隊が遠征するようになった。僕の師匠は阪本寧男である。彼は木原均の最後の助手 (遺伝学研究所研究員) で、彼がエチオピアに行き、雑穀に興味を持った時に偶然が重なって弟子入りした。従って、僕は京都大学出身ではないが、木原学派の系譜の上に学問的には位置づくし、京都大学農学博士 (1980) である。木原均や中尾佐助には直接お会いしている。特に中尾佐助の理論にはかなり傾倒した。東京学芸大学に就職した際に阪本の示唆で、自然文化誌研究会 (大学探検部) を創ろうと、ポスターを貼ったところ、4 人の学生が参加して、西原調査を始めた (1975)。図 2 はその後の歴史をまとめたものである。そのうちの男子学生

が今の代表理事である中込卓男である。

一方で、塚原東吾や中込貴芳らは冒険探検部を別に創っていたので、双方の協議の上で 1982 年に合併して、東京学芸大学自然文化誌研究会冒険探検部、愛称学大探検部になった。その後、大学公開講座子供向けの冒険学校に熱が入ってきたので、冒険好きの学生にはあきたらずに、冒険探検部は独立的に活動していた。しかし、御多分に漏れず、他大学と同様に、学生の活動は次第に低調になり、ついに 2020 年に廃部に至った。ただし、OB 会である自然文化誌研究会は NPO 法人化して (2004)、今日まで 50 年継続してきた。冒険学校は山梨県小菅村に独自のキャンプ場を造って、通年開催している。これに加えて始めた農学校は学生サークルちえのわの学生たちが継承してキャンパス内の彩色園 (環境教育研究センターの教材植物園) で通年開催し、彼らは冒険学校の運営にも協力している。

これまでの 50 年間の主な活動を表 3 にまとめた。図 2 に示したプロジェクトを中心に冒険探検活動とその普及啓発活動を続けている。多くの学生や小金井市民、小菅村民に支えられ、それなりの成果を蓄積してきたことに高い誇りを持っている。順風

満帆な道行きではなく、常に困難な状況下に置かれたが、何とかそれなりに楽しく友情によって乗り切ってきた。詳細は 50 周年記念誌で記されるだろう。

参考文献

本多勝一 1998、本田勝一集第 4 巻、探検部の誕生、朝日新聞社、東京。

今西錦司編著 1952、大興安嶺探検、講談社、東京。

中尾佐助 2004、中尾佐助著作集、第 III 巻、探検博物学、北海道大学図書刊行会、札幌。

長澤和俊 1969 世界探検史、講談社、東京。

梅棹忠夫 1959、冒険的精神、朝日ジャーナル。

表 3. 学大探検部の活動史概要

年代	主な出来事	学術調査	冒険学校	セミナー・講習会	関連活動	出版・その他
1974	準備構想					
1975	東京学芸大学自然文化誌研究会創立	関東山地調査開始				
1976						
1977						
1978						
1979						
1980						
1981	冒険探検部創立	北海道調査開始開始、アンナプルナ登頂隊に派遣				
1982		バングラディッシュ農村開発に派遣、ドイツに巡検			北八ヶ岳登山、パラグライダー班が全国大会参加、富士山評決ケーピング	野外学習I発行
1983		トルコ東部アララト山塊調査に派遣			自転車でオーストラリア横断	
1984		第1次中国遠征、韓国遠征隊予備調査		農場で農耕文化複合プログラム開発、第1回野外教育セミナー	雲取山登山	
1985	学大冒険探検部と合併、自然文化誌研究会冒険探検部に改組（愛称：学大探検部）	パキスタン・イランを自転車で縦断、第2次中国遠征、インドネシア学術探検予備調査、フィリピン第1次調査		第2回野外教育セミナー、第3回野外教育セミナー	インドネシア・プロジェクト発足、国際留学生の集い開催	野外学習II発行
1986		韓国調査、インドネシア・プロジェクト第一次、中国遠征第3次		マラソン報告会アジアは今、第1回野外教育シンポジウム、第4回野外教育セミナー		野外学習III発行
1987		第4次中国遠征、青年海外協力隊でガーナへ、イギリス野外活動学校参加		第2回野外教育シンポジウム		学術調査報告I発行
1988		第5次中国遠征	五日市プロジェクト山小屋建設、子供のための冒険学校開始、キッド部会発足	第3回野外教育シンポジウム、第5回野外教育セミナー、第1回雑穀研究会シンポジウム	北岳登山	
1989			子どものための冒険学校第2期	第6回野外教育セミナー、第4回野外教育シンポジウム、連続講演会アジアを考える、第3回雑穀研究会シンポジウム	ジュニア部会の大菩薩峠登山、槍ヶ岳登山、	
1990	創立15周年記念全国探検部シンポジウム「風と人と」、第6回野外教育シンポジウム、日本環境教育学会創立		子どものための冒険学校第3期、North Carolina Outward Bound School に派遣	第7回～9回環境教育セミナー（改称）、	南北アルプス登山	
1991		パリ、ボルネオに渡航、インドネシア・アルー諸島に渡航	子どものための冒険学校第4期	連続講演会アジアを考えるII、第10回環境教育セミナー		
1992		国内の雑穀調査は継続	子どものための冒険学校第5期	第6回雑穀研究会シンポジウム、家庭栄養研究会・雑穀シンポジウム	下関まで徒歩旅行	JTクロスカルチャー大賞受賞
1993		中央アジア学術調査、済州島調査	子どものための冒険学校第6期	第11回環境教育セミナー		
1994			子どものための冒険学校第7期	第12回～13回環境教育セミナー	釧路川カヌー下り	中央アジア学術調査報告
1995	Asian-Pacific Environmental Education Symposium		子どものための冒険学校第8期	第14回環境教育セミナー、第9回雑穀研究会シンポジウム		
1996			子どものための冒険学校第9期、小菅村すげのこ祭りに参加	第15回環境教育セミナー		
1997	タイ・日本自然クラブ、ラジャバト・プラナコン大学と東京学芸大学の交流協定		子どものための冒険学校第10期	第16回環境教育セミナー		

続き

年代	主な出来事	学術調査	冒険学校	セミナー・講習会	関連活動	出版・その他
1998	International Symposium on Common Agenda of Environmental Education in the Global Age		子どものための冒険学校 第11期	第17回環境教育セミナー ナー		国際シンポジウム講演要旨集
1999			子どものための冒険学校 第12期	第18回環境教育セミナー ナー		
2000			子どものための冒険学校 第13期	第19回環境教育セミナー、 第14回雑穀研究会シンポジウム		
2001			子どものための冒険学校 第14期	第20回環境教育セミナー ナー		
2002			ぬくい小年少女農学校、 小菅村でのびと講座開始	第2回雑穀研究会春の勉強会、 第16回雑穀研究会シンポジウム		
2003			小菅冒険学校開始	ミレット・コンプレックス開始、 第21回環境教育セミナー		
2004	活動拠点を小菅村に移す、東京都認証NPO法人になる。		冒険学校INCH	第22回環境教育セミナー中止、 第1回雑穀栽培講習会		
2005			冒険学校INCH、ちえのわ農学校	ミューゼス研究会発足、 第23回～第24回環境教育セミナー	文部科学省現代GP	民族植物学ノオト創刊
2006	エコミュージアム日本村/植物と人々の博物館を小菅村中央公民館で整備		冒険学校INCH、ちえのわ農学校	現代GP連続講演会、 第25回～第26回環境教育セミナー、 第5回雑穀栽培講習会	エコミュージアム日本村/植物と人々の博物館構想	ヒエ焼酎の試作(笹一酒造)、 民具の整理、 小金井夢プラン受賞
2007	小菅村と東京学芸大学の社会連携協定締結		冒険学校INCH、ちえのわ農学校	第1回多摩川流域エコミュージアム・ネットワーク・シンポジウム、 第27回環境教育セミナー/現代GP講演会	エコミュージアム日本村/植物と人々の博物館特別展示雑穀	民族植物学ノオト第2号
2008			冒険学校INCH、ちえのわ農学校	第2回多摩川流域エコミュージアム・ネットワーク・シンポジウム、 第28回環境教育セミナー、 環境教育学会小集会、 第8回雑穀研究会春の勉強会、 第10回雑穀栽培講習会		
2009	エコミュージアム研究会全国大会第15回		冒険学校INCH、ちえのわ農学校	第29回環境教育セミナー	エコミュージアム日本村/植物と人々の博物館特別展示インドの雑穀、 山村の養蚕	
2010	生物多様性条約締約国会議COP10/CBD市民ネットワーク/人々とたねの未来作業部会		冒険学校INCH、ちえのわ農学校	第30回環境教育セミナー、 種子の学習会1～3回、 CBD作業部会1～8回	東京学芸大学曹宇率60周年記念雑穀発泡酒Sobibo ビーボ	民族植物学ノオト第3号
2011		ホームガーデン研究会	冒険学校INCH、ちえのわ農学校	第31回環境教育セミナー ナー		民族植物学ノオト第4号
2012	雑穀研究会シンポジウム、環境学習シンポジウム		冒険学校INCH、ちえのわ農学校	第26回雑穀研究会シンポジウム、 日本村塾3ゼミ開始		環境学習シンポジウム報告書、 民族植物学ノオト第5号
2013			冒険学校INCH、ちえのわ農学校	第32回環境教育セミナー ナー		民族植物学ノオト第6号
2014	雑穀街道の提案		冒険学校INCH、ちえのわ農学校	第33回～第34回環境教育セミナー ナー		民族植物学ノオト第7号
2015	自然文化誌研究会冒険探検部創立40周年記念		冒険学校INCH、ちえのわ農学校	第35回～第36回環境学習セミナー(改称)、 植物と人々の博物館の教育に関する国際シンポジウム	植物と人々の博物館メルマガ発行開始	生物多様性アクション大賞審査員賞、 民族植物学ノオト第8号

続き

年代	主な出来事	学術調査	冒険学校	セミナー・講習会	関連活動	出版・その他
2016		ラジャバト・プラナコン大学から訪問	冒険学校INCH、ちえのわ農学校	雑穀栽培講習会、日本村塾、第37回～第39回環境学習セミナー	ミューゼス研究会	民族植物学ノオト第9号
2017	植物と人々の博物館は井狛に移転		冒険学校INCH、ちえのわ農学校	伝統知シンポジウム、雑穀栽培講習会/藤野		民族植物学ノオト第10号
2018			冒険学校INCH、ちえのわ農学校	第40回環境学習セミナー、雑穀栽培講習会/藤野	雑穀街道普及会	民族植物学ノオト第11号
2019	東京学芸大学冒険探検部廃部		冒険学校INCH、ちえのわ農学校		雑穀街道普及会	民族植物学ノオト第12号
2020			冒険学校INCH、ちえのわ農学校		Sobiboピーボ復刻企画	民族植物学ノオト第13号
2021			冒険学校INCH、ちえのわ農学校	環境学習市民連合大学開始、自給農耕ゼミ、環境楽習会	雑穀街道普及会の陳情活動	民族植物学ノオト第14号
2022			冒険学校INCH、ちえのわ農学校			民族植物学ノオト第15号
2023			冒険学校INCH、ちえのわ農学校	環境学習市民連合大学開始、自給農耕ゼミ/佐野川、環境楽習会	雑穀街道普及会解散、Sobiboピーボ復刻	民族植物学ノオト第16号
2024			冒険学校INCH、ちえのわ農学校			民族植物学ノオト第17号
2025	自然文化誌研究会創立50周年		冒険学校INCH、ちえのわ農学校			民族植物学ノオト第18号